

「2024年度 大学生と学ぶ 対話型鑑賞ファシリテーション講座」 受講生（5期生）募集のお知らせ

京都芸術大学アート・コミュニケーション研究センター（以下ACC）主催「大学生と学ぶ対話型鑑賞ファシリテーション講座」の2024年度の受講生（5期生）を募集いたします。今年で5年目を迎える本講座は、美術・博物館や教育現場だけでなく、ビジネスパーソンや医療従事者へむけた研修など、今やさまざまな分野で広く活用されている対話型鑑賞を、理論と実践の両面から本格的に学ぶオンライン連続講座です。

本講座には3つのプログラムをご用意しています。

- ①講座（全8日・隔月2日間×4回開催、ファシリテーションの実践含む）
- ②ファシリテーションの実践練習を行う定期練習会（任意参加、月2回開催）
- ③SNS（facebook）を活用した情報交換や受講生の交流・研鑽のためのオンラインコミュニティ

これら3つのプログラムをご活用いただき、鑑賞力向上とファシリテーションスキル習得を目指していただきます。また、本講座は講師に加え、本学で対話型鑑賞を学ぶ現役大学生がピアサポートスタッフとして参加いたします。

| 実施概要 |

■ 開講期間：2024年7月6日～2025年3月31日（予定）

①講座（必須参加）※全8日

[第1部] 2024年7月6日（土）～7月7日（日）

[第2部] 2024年9月7日（土）～8日（日）

[第3部] 2024年11月9日（土）～10日（日）

[第4部] 2025年1月11日（土）～12日（日）

【時間：土曜 13:00～18:00 / 日曜 10:00～16:00（休憩1時間含む）】

②定期練習会（任意参加）※全12日

開催日時：第2火曜日（18:30～20:00）・第4土曜日（10:00～11:30）

7/27（土）、8/13（火）、8/24（土）、9/10（火）、9/28（土）、10/8（火）、10/26

（土）、11/12（火）、11/23（土）、12/10（火）、12/21（土）、1/7（火）

※7月は第2火曜日の定期練習会はありません。12月と1月は日付通りの日程で開催します。

■講師・スタッフ

講師：伊達隆洋（アート・コミュニケーション研究センター所長／京都芸術大学アートプロデュース学科 准教授・学科長）

スタッフ：京都芸術大学アートプロデュース学科 学生、アート・コミュニケーション研究センター研究員

■参加条件：全8日間すべての講座に参加できる方
定期および自主練習会で、実践練習に積極的に参加することができる方

■参加方法：オンライン（Web 会議サービス Zoom）

■定 員：最大 40 名

※お申し込み者多数の場合は、お申し込みフォームの回答を選考材料とさせていただきます。あらかじめご了承ください。

■受 講 料：15 万円（税込）

▶ 申込方法

お申し込みフォーム <https://forms.gle/y5NZQLFugu4oHFv4A>

必要事項をご記入の上お申し込みください。

お申込み〆切：5月12日（日）23:59

※選考結果のご報告は6月初旬頃を予定しています。

※本講座における対話型鑑賞のスタンスや問題意識をよりご理解いただくため、お申込みの前に『ここからどう進む？対話型鑑賞のこれまでとこれから アート・コミュニケーションの可能性』（淡文社）の7章をご一読されることをおすすめいたします。

| 講座趣旨 |

対話型鑑賞は、鑑賞者同士のコミュニケーションを通じてアート作品を読み解くことで、鑑賞に必要となる能力や、作品を鑑賞する際のリテラシーを育成する鑑賞教育の手法です。

子どもから大人まで、アートに親しんだことのない人でも参加でき、鑑賞を通して観察力や思考力、コミュニケーションスキルといったさまざまな能力の発達に寄与することから、全国の美術館や学校現場で活用されています。また、近年は美術の領域を超えて、ビジネスパーソンや医療従事者の能力開発、さらにはコミュニケーションやコミュニティの創出など社会課題へのアプローチとしても広く一般に活用されるようになってきました。

こうした広がり一方で、対話型鑑賞を専門的・体系的に学んだ実施者は未だ少なく、実施者の理解不足や技術不足によって誤解や批判が広がっているというのもまた現状です。そのため、理論と技術をしっかりと身につけた対話型鑑賞の実施者を育成することは喫緊の課題なのです。

本講座は、対話型鑑賞の基礎をなす理論と技法を体系的に理解した上で実践経験を積んだファシリテーターの育成を目的に、対話型鑑賞の源流であるニューヨーク近代美術館（MoMA）で開発された鑑賞教育プログラム Visual Thinking Curriculum (VTC)、および、

後に開発者らが改良発展させた Visual Thinking Strategies (VTS) の理論と技法を体系的・実践的に学びます。また、応用として、これらを日本に紹介した第一人者である福のり子（元 ACC センター所長）が日本で発展させた対話型鑑賞教育プログラム「ACOP／エイコップ（Art Communication Project）」の手法も紹介いたします。

▶スタッフ

講師 | 伊達隆洋（アート・コミュニケーション研究センター所長／京都芸術大学アートプロデュース学科 准教授・学科長）

専門領域は人間科学・臨床心理学。2007年に外部研究者として京都造形芸術大学（現・京都芸術大学）の対話型鑑賞教育プログラム「ACOP」の分析に携わったのをきっかけに、2009年より同大学にて対話型鑑賞の実践と研究に従事。全国の美術／博物館・学校教育関係者への研修のほか、対話型鑑賞を応用した医療従事者の養成や企業研修なども多数手がける。共著『ここからどう進む？対話型鑑賞のこれまでとこれから アート・コミュニケーションの可能性』（淡交社）、共訳『どこからそう思う？学力をのばす美術鑑賞 ヴィジュアル・シンキング・ストラテジーズ』（フィリップ・ヤノウィン著、淡交社）』、寄稿「日本に対話型鑑賞は定着するか」（『ART collectors' 』2021年10月号、生活の友社）など。

学生スタッフ | 京都芸術大学アートプロデュース学科 ACOP2 履修生

<https://artproduce-kua.com/projects-lectures/acop2/>

▶注意事項

- ・ Zoom のアカウントをご用意ください。取得方法は Zoom [公式ホームページ](#) をご参照ください。
- ・ 講座は原則、パソコンで受講いただきますようお願いいたします。スマートフォンやタブレットの場合、機種やアプリの制限により鑑賞やファシリテーションの実践や、講座内で用いるオンラインサービスに対応できない場合がございます。
- ・ インターネット環境について：有線 LAN での接続を推奨します（Zoom ミーティングが安定して利用可能な回線速度が必要です）。また、会社等の VPN を経由して接続している場合もオンラインサービスの利用が制限される可能性がございます。受講者様の通信環境による不具合については対応致しかねますので、あらかじめご了承ください。
- ・ 主催者都合による中止を除き、お申し込み後の返金は致しかねます。
- ・ 本講座の様子は画像や動画で記録させていただきます。録画動画は、復習学習のため、受講生に視聴期限付きで提供いたします。また、本学 web サイトや活動報告書等の広報活動に用いる場合がございますので、ご了承ください。

▶ お申込みフォーム <https://forms.gle/y5NZQLFugu4oHFv4A>

お申込み〆切：5月12日（日）23:59

※選考結果のご報告は6月初旬頃を予定しています。

| Q&A |

Q. 対話型鑑賞と VTS (Visual Thinking Strategies) は同じものですか？

A. 「対話型鑑賞」という名称は、1990年代に VTC (Visual Thinking Curriculum) が日本に紹介・普及される過程で日本独自に意識された造語です。元々は VTC やそれに基づくプログラム (VTS 含む) を指す狭義の用語でしたが、30年のなかでコミュニケーションが介在する鑑賞スタイル全般に区別なく使われるようになっていきました。このことが現在のさまざまな混乱や誤解を生じさせる要因のひとつにもなっています。本講座ではこうした経緯も紐解きながら、広義の対話型鑑賞ではなく、基礎となる VTC/VTS とその応用である ACOP を扱います。

--

Q. 対話型鑑賞は MoMA で開発された鑑賞教育プログラムが源流というのは間違いだと聞いたことがありますか？

A. これも日本独自の名称に起因する混乱のひとつです。「対話型鑑賞」という用語は VTC を日本で紹介・普及する際に意識として生まれた造語です。したがって MoMA のプログラムが源流というのは間違いありません。他方、「対話型鑑賞」という言葉は、日本ではその後30年の間にコミュニケーションを介した鑑賞スタイル全般にまで用いられるようになっていたため、こうした広義の意味で捉えれば、鑑賞の際に対話がおこなわれていた事例は MoMA のプログラムよりも前から存在しています。

--

Q. 参加者が自由に作品をみて自由に話すのにファシリテーターの技術は必要ですか？

A. 対話型鑑賞は参加者が自由に作品をみることを推奨していると説明されることがありますが、これは誤解もしくは説明不足です。対話型鑑賞は本来、作品鑑賞の土台となる体系的な観察や論理的な思考、これらを駆使するリテラシーといったことを身につけることを目指す教育プログラムとして開発されました。鑑賞者が好きなように作品をみるのが対話型鑑賞の目的ではありません。もちろん、作品をどのように受け取るかは最終的に鑑賞者に委ねられますが、プログラムの実施者には目的や設計が必要です。連続的なカリキュラムを基に、鑑賞者のレベルに応じたプログラム設計や作品選び、現場でのファシリテーションを通じて鑑賞者の能力やリテラシー獲得をサポートできる技術が実施者には必要になります。

--

Q. 対話型鑑賞を美術鑑賞ではなくコミュニケーションを目的に活用する場合、ファシリテーションをわざわざ学ぶ必要はありますか？

A. 「コミュニケーション」という言葉が何を指しているかによると思います。参加者がとりあえず口を開く、発話するというのをゴールにするのであればファシリテーターに求められるものはそれほど多くはないかも知れません (実際には「参加者がとりあえず口を開

く、発話する」を最終目的に設定しなければならないほどコミュニケーションが困難な状況への介入には、むしろファシリテーターに高度な技術が求められます)。

鑑賞目的かコミュニケーション目的かという二項対立で語られることがありますが、実施者が鑑賞を充実させることによって、参加者間により豊かな気づきや学びを対話から生じさせることが可能になりますし、充実したコミュニケーションを起こすことが鑑賞の充実には欠かせないため、両者は単純に切り離せるものではないと考えています。

--

Q. 対話型鑑賞のファシリテーション技術とは「3つの問いかけ」のことですか？

A. 「対話型鑑賞のファシリテーションは3つの問いかけだけ」という誤解が一部で流布していますが、VTC/VTSには中核となる3つの問いかけ以外にも重要な技法がさまざまあります。また、これらの技法は背景理論と紐付いているため、どのような場面で用いるかといった判断には背景理論の理解も重要になります。本講座ではVTC/VTSの理論と技法に加え、ACOP独自のファシリテーション技法も扱います。

--

Q. 対話型鑑賞は作品の見た目の印象を話してるだけで、作品を鑑賞したことにならないのでは？たとえばコンセプチュアルな作品を見た目だけ話しても無意味では？

A. イエス&ノーです。まず、対話型鑑賞は作品の見た目の印象を話すだけというのは誤解です。実際にはもっと掘り下げて作品を考察することで、コンセプチュアルな作品を題材にすることもできます。しかし、実際には見た目の印象を口々に話すだけの対話型鑑賞が多いのもたしかです。

また、対話型鑑賞は本来、繰り返し何度も経験することで次第に鑑賞のリテラシーが獲得されていくよう、背景理論に基づきどのようなレベルの鑑賞者にどのような作品をどのような順番で見せ、どのようなファシリテーション技術を用いるか、綿密にデザインした上で実施するものです。こうした前提が伝わらないまま、1回の対話型鑑賞を切り取って「あれは鑑賞ではない」と批判されている場合があります。他方、実施者もこうした前提を知らずにおこなっているケースが少なくないのは対話型鑑賞が抱えている大きな課題です。

--

Q. 講座受講後、対話型鑑賞ファシリテーターとしての資格や認定書はもらえますか？

A. 現在のところ資格や認定書はお出ししていません。対話型鑑賞の理論と技法を体系的に理解し、実践経験を積んだファシリテーターの育成という目的から、資格や認定書による裏付けをおこなっていく必要性も認識・検討はしておりますが、他方、日本に紹介され30年の間にこれだけ広義に普及しているなかで、資格や認定が正統性・真性性といったかたちで排他的に働いたり、建設的な議論や応用的・発展的改良を妨げることにもなりえることを危惧し、現在は資格認定をしておりません。

なんらかの肩書きをお渡しするということはありませんが、対話型鑑賞を本気で習得したい、ファシリテーションの技術を磨きたい、疑問や課題を解決したいといった実質的な学びを必要とされている方に向けた講座であるをご理解いただけましたら幸いです。

なお、受講後、本講座を受講したということを対外的にお話しいただくのはまったく問題ありません。

▶ お申込みフォーム <https://forms.gle/y5NZQLFugu4oHFv4A>

お申込み〆切：5月12日（日）23:59

※選考結果のご報告は6月初旬頃を予定しています。

｜主催・お問い合わせ｜

京都芸術大学アート・コミュニケーション研究センター

〒606-8271 京都市左京区北白川瓜生山 2-116

<https://www.acop.jp>

E-mail : info@acop.jp

Tel : 075-791-9132

受付：水・木・金曜日 10：00～16:00（担当：吉原）